

リーディングマラソンと訳読・チャンクリーディング・シャドーイングが読解力に及ぼす影響

宮崎 操¹

要旨：筆者の授業では訳読，チャンクリーディング，シャドーイング，単語のクイックレスポンス，毎週の単語テスト，平常点制度を導入している．本論文のクラスでは新聞記事の教材を使用，授業外課題として新聞記事を読み，記事と感想等の提出を非強制・任意で課した．SLEP Reading テストによって事前と事後の読解力を調査し，提出・非提出の2群の伸びを調べた．両群とも読解力は有意差で伸び，提出群は非提出群よりも伸びが著しかった．その結果，自由課題のリーディングマラソンは有効だとわかった．また，訳読，チャンクリーディング，シャドーイング，単語のクイックレスポンス，単語テスト，平常点制度も読解力伸張に有効だと思われる．

キーワード：リーディングマラソン，訳読，単語リスト先渡し，クイックレスポンス，チャンクリーディング，前から訳す，音読，シャドーイング

1. はじめに

最近の英語教育の研究者間では，従来の伝統的な文法訳読法の授業は批判され，否定的に受け止められる傾向にある．授業者が一方的に講義するだけでは，その批判にも一理あると思われる．

筆者は通訳者出身なので，和訳は不可欠だと考えるが，和訳の授業にも欠点はある．その欠点のうち，本論に関係のある4点について，背景としてここで述べることにする．それは，

- ① 英文を読む絶対量が不足し勝ちである．
 - ② 文中の未知単語を推測して読む習慣が，育ちにくい．
 - ③ 一人の学生が挙手または指名されて訳すときに，準備不足，理解できなかった等の理由で，時間がかかったり沈黙したりすると，他の多くの学生が退屈し，授業のテンポが損なわれる．
 - ④ 教員の一方的下達になって，学生との interaction に欠ける．
- である．

以上の欠点①②を補うために，筆者が非常勤講師をしていたD大学1年生の2003年前期の講読の授業で，従来の授業に加えてリーディングマラソンを任意・非強制の授業外課題として実施した．その結果について報告する．

2. 研究方法

2. 1 教室・学生・事前事後の SLEP テスト

教室はLLではなく，普通教室であった．1クラスは法学部39人，もう1クラスは経済学部で52人，計2クラス91人であった．うち法学部では15人が，経済学部では20人が事前事後のリーディングテストの両方または一方を受けなかったため，結局被験者は法学部24人，経済学部32人であった．

事前事後の読解力を測るために，SLEPリーディングテストを実施した．SLEPテストは，米国でTOEFLを実施し，TOEICの作成をてがけているEnglish Testing Service社製のテストで，高校卒業レベルの力を測定する．玉井(2001¹⁾ 宮崎(1998²⁾，2000³⁾ではSLEPリスニングテストが使用されてリスニング力向上に有効であったと証明されている．

2. 2 教科書と単語リスト

使用教科書は『News Express 2002⁴⁾』(木塚・Wallace 2002)で，新聞記事から学生向きの時事問題を選んだ教科書である．ほとんどの学生が英字新聞を読んだことがない．高校生英字新聞読解調査によると，英字新聞を読んだことがある高校生は2割程度である(根岸⁵⁾ 2006)．これは高校生の数字だが，本論文の被験者は大学1年生なので，英字新聞の読書経験については高校生とさほど変わらないと思われる．したがって大学生にとっても難解である．

そこで，高難易度単語対訳リストを，前週に配布して予習を促した．毎回教員が単語リストを作成して配布するのは学生が受身になるので，2回目ま

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 英語科 准教授

では筆者が作成した単語リストを配布し、3回目からは学生が作成・提出し、筆者がプリントして前週までに配布する形式をとった。

学生をグループ分けして予習の単語調べを課した。学生は前期に1回単語調べをし、2週前に提出する。またグループで事前に和訳を考えてくることを課した。それによって、前述の欠点③のスピードの欠如を補い、授業のスピードを上げるよう努めた。これについてはあとで、想定外の問題が持ち上がったが、それは2.3.3グループワークのところ述べる。以下はグループ分けした後、各グループに担当記事を割り当てた表である。

授業日	P	内容	単語リスト担当者	提出日	配布日
4.10		・リーディング事前テスト ・グループ分け	・教員 ・次週分配布		
4.17	p.10	NY9.11テロ	教員		4.10
4.24	p.18	小泉総裁選勝利	教員		4.17
5.8	P.24	京都議定書からUS離脱	グループA	4.17	4.24
5.15	P.14	代理母	B	4.24	5.8
22	P.36	北京オリンピック	C	5.8	5.15
29	P.28	G8	D	5.15	22
6.5	P.12	タリバン	E	22	29
12	P.22	靖国神社参拝	F	29	6.5
19	P.32	失業	H	6.5	12
26	P.16	安楽死	I	12	19
7.3	P.30	刈羽村	J	19	26
7.10	P.38	捕鯨・リーディング事後テスト	K	26	7.3
	P.42	ユニクロ	L		7.3
	P.44	宇宙旅行	M		7.3

Table 1 word assignment list for students

法学部は3人ずつ、経済学部は4人ずつのグループとなった。

2.3 授業

以下に述べる指導は、他の授業でもこの授業でも、また現在も実施している。本論1はじめにの欠点③の「テンポが損なわれる」のを補うおぎなうために、クイックレスポンス、音読、シャドーイング、チャンクリーディングを実施して、授業のリズムとテンポを上げるよう努めている。欠点④を補うためには、平常点をつけて授業を活性化している。この平常点制度は静(1999⁹⁾)に倣った。さらに毎週単語テストを前週学習分から10問出している。

2.3.1 単語のクイックレスポンス

クイックレスポンスとは、単語の repeat after the teacher である。但し、教員の発声の後の学生の発声を素早く間髪入れずに行うように誘導する。以下に例示する。Tは教員の音声、Ssは学生のリピートの音声である。ずらせて提示しているのは時間差を示している。

T: apparent

Ss: apparent

T: topple

Ss: topple

2行目の、学生の apparent という発声の終わる少し前に、学生の発声の最後の部分にかぶせるように次の語を教員が発声して(3行目)、すばやくリズムをつけてスピードに慣れさせる。これを繰り返すと学生のレスポンスが早くなり、授業にリズムと緊張感が生まれる。

学生が発声するときのキュー(開始の合図)は、手拍子、鉛筆などで軽く机や教科書をたたき、などをしていく。鉛筆等でリズムをとると、音が小さすぎて、学生の音声にかき消されてしまう。また手拍子は教室の後まで音がよく通るが、両手がふさがって教科書が持てない。それで現在はハンドカスタを使用している。片手にハンドカスタ、片手に教科書を持って教室をまわり、学生の顔も見ながら発声を促すことができる。そしてハンドカスタの音は教室中にはっきり聞こえる。

クイックレスポンスのコツは以下の2点である。

- ① 拍子をとって、学生たちのリピートのスピードを、教員がコントロールする。
- ② 学生の発声が終わる直前に、重ねるように次の単語の音を出す。

これにより学生の発声が早くなり、クイックレスポンスできるようになる。

このスピードの点を紙面でご理解いただくのは難しいが、現在本高専2年生(普通高校2年生に該当)に使用している教科書 LovEng II⁷⁾(啓林館)付属のCDの単語リピートでは、CDの単語の音声のポーズの間に、学生たちが3回リピートできる程度の速さである。

クイックレスポンスは高校・大学ではたいいてい教員の英語→学生の英語だが、通訳者あるいは通訳の授業では英→日、日→英なども行う。通訳者はテープに事前に吹き込んでおいて、通訳時に必要な単語の対訳リストを頭に素早く叩き込んでいく。授業では全体のコーラスクイックレスポンスだけでなく、教室を回って学生個人をつぎつぎ指差して、次から

次へとどんどんクイックレスポンスさせることも行っていた。授業に緊張感が生まれ、その場で単語を覚えてしまう。

2. 3. 2 スラッシュリーディングとチャンクリーディング

スラッシュリーディングは本来通訳練習法示す用語で、同時通訳の準備として、前から訳せる範囲まで原稿にスラッシュを入れて、なるべく戻り訳をしないように前からスラッシュのところまで理解し、訳していく読み方である。したがって通訳者は概して句・節で区切ることが多く、大学生や高校生には1つの区切りが長すぎて難しくなってしまうこともある。そこで、授業ではチャンクリーディングとして、およそ句 (phrase) か、もう少し短い区切り方を行っている。

ここではスラッシュリーディングは主として通訳練習の手法、チャンクリーディングは筆者が授業でもっと短く区切っている読み方、としてそれ以上の定義は行わないこととする。

2. 3. 3 チャンクリーディングと「前から訳す」

チャンクリーディングのためのスラッシュの入れ方は主として句だが、句が長すぎる時は途中でも意味の区切れ、音の切れ目で区切る。関係代名詞、後置修飾、不定詞、分詞、前置詞句などで区切ることが多い。ある英会話スクールで、日本人講師が2語ずつ区切って指導しているのを、見かけたことがある。これでは細かすぎて、意味・情報がこま切れになってしまい、学習者には弊害となろう。また他の教員から区切り方を尋ねられることもあるが、また別の機会に論じることとする。

通訳トレーニングの「前から訳す」練習はリスニングの練習に役立つと思われる。戻り訳はできても、戻り聞きはできない。流れ出てくる音を、そのまま聞いた順に前から理解するほかない。「前から訳す」練習をしていると、前から理解する習慣が身につく、リスニング向上に役立つと思われる。

また英語は日本語と語順が異なるが、人は思いついた順に話すと言われているから、発話順に理解して訳すのは理にかなっていると思われる。スラッシュの入れ方と、「前から訳す」時の訳し方を例示する。

Koizumi arrived at the shrine / just after 4:30p.m. / in a
小泉総理が神社に着いたのは / ちょうど4:30すぎ

formal mourning coat.

で、正式なモーニングを着用していました。

この着色部分が、前から訳すときに日本語としてなめらかにつなぐコツである。

学生による従来の戻り訳：「小泉は公式のモーニングで4:30過ぎに着いた。」

学生にスラッシュを入れる場所を提示するのは教材/資料提示装置(OHC)でスクリーンに見せるか、またはCDを流しながら、スラッシュを入れるところで止めて、「ここでスラッシュ。」と告げている。

2. 3. 3 グループワーク

前年度はその日に読む記事を、パラグラフごとに単語のグループに割り振って、訳を作る作業を毎回授業中にさせた。これは訳読授業の欠点③を補うための発想であった。筆者は教室を回って質問に答えたり、ヒントを与えたりした。教室を回って教師が近くに来ると質問しやすいようで、よく質問を受けた。半期ごとに担当教員が替わる大学では、質問しやすい点は学生にとっては良かった。

しかしその学生達から、自分のグループが担当した所はよくわかるが、他のグループが担当したところは説明されてもあまりよくわからず、結局グループで担当したパラグラフ以外の全体が把握しにくかった、というフィードバックを受けた。これが2.2教科書と単語リストの第3パラグラフのTable1の直前で述べた、「想定外の問題」である。

学生たちは事前に担当部分をさらに細かく区切って1文毎に担当者を決めたと言っていた。彼らは少しでも負担を減らすことばかりを考えて、全体、論理の流れ、ストーリーの展開が見えなかったようだ。またパラグラフごとに割り振ったのもその一因と言える。

一方で前年度の学生から、グループワークのおかげで全然知らなかった人、再履修生等が友人になった。と感謝された。単語下調べのグループワークも含めて、グループワークの短所長所をまとめると、

- ① 授業中教師が各グループを巡回すると、学生達と教師の距離が近いので、学生が質問しやすい。
- ② 学生達に新たな友人ができる。
- ③ 各グループにパラグラフを割り振って分担させると、他のグループが担当した部分が理解しにくく、全体・展開・論理・流れが見えにくい。

本論文の当該年度では1回だけグループワークを授業で試みたが、やはり学生が困惑して理解度が低かったので、以降は実施しなかった。

2. 3. 4 音声練習

- ① 単語のクイックレスポンス：音読やシャドーイングの前にもう1度単語の読みを練習する。
- ② repeat after the teacherによる音読：CDの切れ目よりも短く、概ね句で区切って練習させる。
- ③ repeat after the CDによる音読：CDのポーズのところで停止してrepeatさせる。CDでは次の

ポーズまでの区切れが長すぎて、リピートさせにくいことがあり、③の前に②が必要である。

- ④ シャドーイング (shadowing) : 本来シャドーイングはテキストを見ないで行う。しかし
- ・ 第1に、シャドーイングはほとんどの学生にとっては初めてである。慣れていないためテキストなしでは難しい。
 - ・ 第2に教材が新聞記事なので、学生にとっては負担が大きすぎる。
 - ・ 第3に LL ではなく普通教室であったため、多くの他の学生の音声が入り込んで邪魔になるため、CDの音声が教室の後ろまで届きにくい。だから、テキストなし、の上に音声も聞き取りにくいと、学生はシャドーイングしにくく、練習にならない。

以上の3つの理由から、テキストを見ながらシャドーイングさせた。

この第3の理由が LL または CALL が必要な最大の理由であるが、本校ではまだ CALL は実現していない。LL または CALL であればヘッドセットをつけてシャドーイングするので、他の学生の音声は全く聞こえない。

テキストを見ながらのシャドーイングを、筆者はセミシャドーイングと呼んでいる。久米 (1981⁸⁾) はパラレルリーディング (parallel reading) としている。

テキストを見ながらシャドーイングすると、文字を読むことにエネルギーがある程度奪われ、音声への集中度が落ちる、と通訳者間では言われている。学生の場合、テキストに頼りすぎて文字のみに意識が行って、無意識のうちに音声が入らず、CD 音声を追い越したり、CD 音声よりずっと遅れたりすることもある。モデル音声に合わせるのがシャドーイングの利点なのに、これではシャドーイングにならない。テキストを見ながらシャドーイングさせるとこういうことも、起こりうる。

②と③は、②③②③、②②③のように繰り返すが、①は最初に、④は最後に、という順序は変えない。段階を経て練習させることが、シャドーイング練習には非常に重要である。段階を経ないで一気にシャドーイングさせるのは学生には無理である。学会等で、『シャドーイング指導しても学生がついて来ない。』と言う質問をよく受ける。まず①を実施してのち②③を何度か繰り返してから④に進む、という段階的指導が大切である。

シャドーイングによって文脈の中での音の強弱や高低、長くまたは短く、速く、ゆっくりなどの読みをまねて、書き手が強調したい点や、文脈の流れなどが理解しやすくなる。

2. 3. 5 単語テスト

最初の授業で学生に、「予告しなくても毎週、実施する。」と言ってあるので、予告し忘れても前週の既習単語の中から、10問のクイズを出している。90分授業の真ん中、授業がだれる頃、行う。

10点満点で6点未満の学生は10点満点になるまで「居残り」をすることを課した。実際には居残りはその日の進度により3回に1回程度にした。10問覚えるのに5分もかからないことをわかってもらうため、他の学生は5分ほど早めに授業を終る。

単語テストを期末に集計する際、最高点の学生を20点とし、他の学生の点数はエクセルでそれにそろえる。

2. 3. 6 平常点

静(1999⁹⁾) に倣って、以下のように平常点をどのクラスでもつけている。

	英語で 答える	日本語で 答える
・ 自主的に挙手・正解	5	4
・ 指名されて正解	4	3
・ 自主的に挙手して答えが正解に近い	3	2
・ 指名されて答えが正解に近い	2	1
・ 誤答	1	1

Table2 The standard of scores

平常点の最高点を10点とし、他の学生は単語テスト同様に、エクセルでそろえる。定期試験を70点とし、単語テスト20点、平常点10点、以上3つの合計で最終的に100点満点の点数をつけている。

この平常点システムでクラスに活気が出る。学生は平常点を得るために、宿題にしなくても予習をして来て「はい」「はい」と何人も挙手する。高校生でも大学生でも平常点を得ることが動機付けになって挙手しやすくなるようである。また高校生以上では、授業で挙手して発言するのは小学生のようで子供じみているという考えがあるようだが、システムとして平常点が成績に組み込まれていると、口実ができて挙手しやすいのではないかと思われる。授業が楽しい、という肯定的な意見が多いのはこの平常点制度にあると思われる。

本学での本年2008年度の筆者の公開授業を見学された学内外の教員から、「授業に活気があって全員が参加していて感心しました。でも学生との応答の都度平常点をエンマ帳に記入するのは大変ですね。」と聞かれた。学生の応答後エンマ帳に記入するのはほんの2、3秒、長くても5秒ほどで、名簿の名前を

探すのに時間がかかっても、きちんとつけてくれることが大切なので、学生達はおとなしく待っている。学生達はよく観察していて、授業後「先生、僕の発表つけてくれましたか。」と聞きにくる。学生の授業への参加度が上がり、授業に活気が出ることを考え合わせれば、成績簿への記入はたいした手間ではない。このシステムの利点をまとめると

- ① 授業に活気が出る。
- ② 学生達が予習をしてくる。
- ③ 教員は学生たちの名前が早く覚えられる。
- ④ 各学生の授業への参加度が数字ではっきり出るので、目くばり・配慮すべき学生が明確になる。

どうしても内気な学生と英語に自信がない学生は挙手しない。数字ではっきりとわかるので、こちらから指名して「平常点の少ない人を指名します。」と告げて答えさせている。

2. 4リーディングマラソン

葉袋 (ミナイ 2004⁹⁾) は語数を距離にたとえて記録ノートを生徒につけさせて、マラソンとしている。ここでは葉袋のような意味はない。任意・自由に新聞を読んで提出する授業外課題を、わかりやすいようにマラソンと名づけた。課題の条件は以下のように定めた。

- ① 強制ではない。
- ② 訳しても訳さなくてもよい。なるべく訳さないで大意を把握する。
- ③ 単語リスト・感想・要約・意見などのうち、どれかをつけて新聞記事とともに提出する。読んだ証拠が必要だからである。
- ④ 1つのテーマを追う。
- ④ ではスポーツ、娯楽、天気予報、芸能、料理、ファッション、話題を呼んだテーマなど、好きなジャンルで同じテーマで記事を追いかけるように、と伝えた。その理由は

- ・同じ記事を繰り返し読んでいるとそのジャンルの語がくり返し出るので覚えやすい。
- ・背景意識が蓄積されて内容把握が速くできるようになり、その分野に強くなる。

である。この語彙の増やし方・背景知識の蓄積は、通訳者トレーニングで使われる方法である。

3. 結果

マラソンは任意・自由課題であった。2クラス合わせると、マラソンをした学生は20名、マラソンをしなかった学生は36名だった。

	提出者	非提出者	計
法学部	8	16	24
経済学部	12	20	32

計	20	36	56
---	----	----	----

Table3 The number of the students who submitted and did not.

リーディング力を測定するのに、ETS社のSLEP (Secondary Level English Proficiency Test) リーディングテストを、事前事後に実施した。SLEPはアメリカの高校生の卒業時の英語のレベルを測るもので、45分間に75問答える。

偏差表があって、ところどころ2問答えていても1問と数えるが、その根拠が示されていないのと、被験者は全員日本人で、帰国学生や留学経験のある学生はいなかったもので、素点を採用した。玉井 (1992¹⁾、宮崎 (1998²⁾、2000³⁾ ではSLEPリスニングテストが使用されて、シャドーイングによるリスニング力の伸びを確認している。結果を表にした。

これはマラソンを提出した学生の、読解力の事前事後の伸びである。

日	n	Mean	Df	SD	Prb.(t-test)
4.10 Pre-test	20	45.8	19	6.879412	
7.10 Post-test	20	54.5	19	5.236511	1.46748E ^{-6**}

Table4 The result of the experiment of the students who submitted Marathon

** $p < .01$, * $.01 < p < .05$, † $.0 < p < .1$
 $1.46748E^{-6} = 0.00000146748$

以下はマラソン非提出学生の、読解力の事前事後の伸びである。

日	n	Mean	Df	SD	Prb.(t-test)
4.10 pre-test	36	50.3	35	8.220486	
7.10 post-test	36	54.8	35	8.133673	0.0001487**

Table5 The result of the experiment of the students who did not submit Marathon

** $p < .01$, * $.01 < p < .05$, † $.05 < p < .1$
 結果をグラフにした。

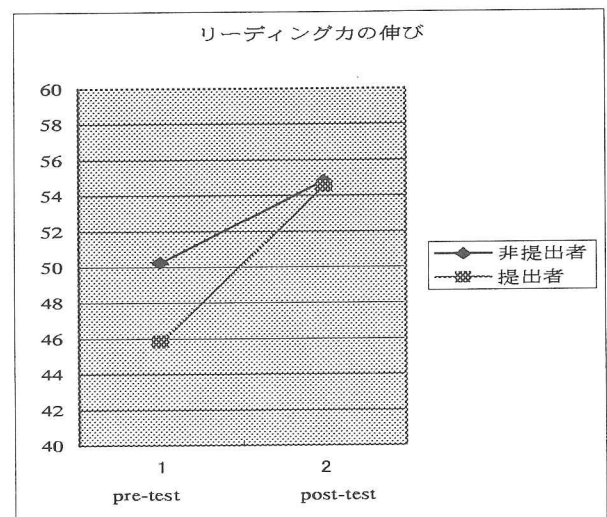


Fig.1 The result of the experiment

4. 考察

4. 1 実験の結果から

Table4 はマラソン提出者の SLEP リーディングテストの事前事後の結果である。75 点満点で、平均 8.7 点伸びており、t 検定では $1.46748E^{-6}$ で伸びは有意である。また Table5 はマラソン非提出者の SLEP リーディングテストの事前事後の結果で、平均で 4.5 上昇、t 検定では 0.0001487 と有意に伸びている。Fig.1 でわかる様に、事前テストでは非提出者の方が得点が高かったが、同じ授業を受けていても彼らはマラソンを出さなかったため、提出者ほどには伸びなかった。

マラソン提出者は努力して結局非提出者に追いついた、と言えよう。その理由は、事前に「マラソンは強制ではない。提出しなくても減点はしない。もしもテストで点数が低かったら、救済措置としてマラソンを提出した学生には、提出量に応じて加点する。」と学生たちに約束してあった。それゆえ、読解力や英語に自信のない学生が熱心に提出し、自信のある学生は事前テストでは好成績で、マラソンは必要なしと判断して提出しなかった、と思われる。

- ① 提出した実験群の学生のほうが、提出しなかった統制群の学生よりも伸びが著しいので、マラソンは効果があった、と言える。
- ② 提出しなかった学生も、読解力の平均は有意差で伸びている。シャドーイングをはじめとするさまざまな練習が、功を奏したようだというが、他の教員の授業で同じテストをした統制群がないので、偶然を排除することはできない。また他の授業でも同様の伸びがあった可能性も排除できないだろう。
- ③ 結果として、マラソンをした学生はしなかった学生よりも、事前の読解力テストでは劣っていたのに、事後のテストではほぼ追いついた、と言えよう。

4. 2 訳読擁護論

近年訳読に対する風当たりが強く、文科省も授業を英語でするようにと指示している。しかし以下のような困った問題も生じている。「和訳をしないために、先生が一生懸命英語で言い換えて説明している—中略—先生が解説しているだけ—後略」(阿野・太田¹⁰⁾ 2008)。このように、和訳を避けることに終始して、結局教師の一方的な下達で、学生が参加できず、コミュニケーション能力が育ちにくいなど、本末転倒した授業も見られるようである。筆者も他のある大学で授業を全て英語で行うよう指示されて、英語での授業を実施したこともあるが、学生からは boing の嵐で、特に「文法の説明が理解できない。また宿題だけは日本語で言ってほしい。」と言われた。

Direct Method の提唱者とされる H. E. Palmer (1917¹¹⁾) は外国語から母語への訳を一切認めないわけではなく、構文が複雑な場合など母語に訳すべきだとしている(小寺 2005¹²⁾)。ここで筆者の訳読の授業への見解を述べる。

- ① 学生は英語を 1 つの「科目」、学習・勉強の対象、として捕らえがちである。日常使うコミュニケーションの道具としての話し言葉とは考えていない。英語も言葉であって、日常使っている日本語と同じように使われる、ということが和訳によって、より身近に感じやすいと考える。
- ② 学生が卒業して仕事で英語が必要になった場合、ある企業では新人に「きみ、これ訳しておいて。」と声がかかることが多いと聞いた。新人なら学校で英語を先日まで学んでいたのだから、声をかけやすい、とのことであった。実社会で最近では e-mail でやり取りしなければいけないことも多々あると思うが、上司から「訳して。」と言われることもあると思われる。訳読の練習は決して無駄ではないだろう。
- ③ 人は生まれる前から母語を聞いて育ち、母語を使って考える。英語を使うときに母語を無視せよと言われても到底できない。また日本では英語は第 2 言語環境つまり English as Second Language ではなく、英語は外国語つまり English as Foreign Language なので、日常的に英語に触れるわけではない。一方日本語は日常的にあふれている。吉田・柳瀬 (2003¹³⁾) は日本語を活用して英語を学ぶことを勧めている。

本実験の結果から、様々な活動を取り入れた訳読の授業で、学生の読解力が伸びている。また提出者、非提出者共に読解力が伸びている。前述したように一方的な上意下達訳読では問題もあるが、様々な活動を取り入れた訳読の授業が、学習の妨げになっているとは、本実験の結果からは考えにくい。

5. 参考文献:

- 1) 玉井健: リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究, 神戸大学博士論文, 神戸大学, 2001
- 2) 宮崎操: The Effects of Shadowing on the Development of communicative Competence, 神戸大学修士論文, 神戸大学, 1998
- 3) 宮崎操: シャドーイングの有効性—リスニングとスピーチ能力育成に関して—, LET 関西支部研究収録 8, 2000
- 4) 木塚春雄, Wallace Gagne: NEWS EXPRESS2002, マクミランランゲージハウス, 2002
- 5) 根岸雅史, 新刊書紹介 Using Newspapers in the

- Classroom, Paul Sanderson(1999)Cambridge University Press, 英語教育, vol.55, No.5, pp.89, 大修館書店, 2006
- 6) 静哲人：英語授業の大技小技, 大修館書店, 1999
- 7) 影浦攻：LovEng II, 新興出版社啓林館, 2007
- 8) 久米昭：Oral English へのアプローチ - “Parallel Reading” の多元的効果, pp.159-173, 南山アカデミア, 南山大学
- 9) 葉袋：多読マラソン「読むゾー」で42.95Kmに挑戦, 英語教育, Vol.52, No. 12(2月号), pp. 25, 大修館書店, 2004
- 10) 阿野幸一, 太田洋：日々の授業にひと工夫「日本語の使い方にひと工夫」, 英語教育, 1999, 大修館書店
- 11) Palmer H.E. : The Study and Teaching of Languages, 1917
- 12) 小寺茂明：英語リーディング指導の基礎, pp.37, 大修館書店,
- 13) 吉田研作, 柳瀬和明：日本語を生かした英語授業のすすめ, 英語教育 21世紀叢書 103, 大修館書店, 2003

THE EFFECTS OF READING MARATHON, TRANSLATION, CHUNK READING AND SHADOWING ON THE READING ABILITY

Misao MIYAZAKI

ABSTRACT : In this author's English classes, translation, chunk reading, shadowing, quick response of new words, a weekly word quiz and daily assessment system are introduced. In these classes, a textbook composed of newspaper articles was used. The students were told to read other newspaper articles and submit comments, a word list of the articles or the article summary. The assignment was not compulsory but voluntary. For the assignment, the students freely chose their favorite topics, as well as the number of topics. By using the SLEP reading test, the submission group and the non-submission group were investigated to see whether they improved in reading ability or not.

Both groups' reading ability improved in terms of t-test probability. The reading ability of the non-submission group improved more than the submission group, probably because their ability was higher. As students with lower scores presumably hoped for higher scores by submitting the assignment to get bonus points, they enthusiastically handed in the assignment. Consequently, it could be said that the reading marathon is effective in improving reading ability in the submission group. It could also be said that translation, chunk reading, shadowing, quick response of new words, the weekly word quiz and a daily assessment system were effective in both classes.

Key Words : translation, word list, chunk reading, shadowing, quick response of new words, weekly word quiz and daily assessment system